

神様は、「先有条件」の設定者である。

平井秀明

善か悪かという、あまりに単純すぎる極端な二元論的な思想は、返って危ないという雰囲気最近蔓延しつつあるようです。いろんな考え方があって当然だということなのだと思えます。しかし、多くの民主的国家で、キリスト教的な一神教を信じている国民がほとんど大多数を占める国家は、世界中にたくさんあります。また、第二次大戦後は、そのようなキリスト教的民主主義国家同士の戦争は一度もないわけです。ですから、神様という存在を抜きに、つまり、宗教を抜きに、平和や国家を論ずることは、今やナンセンスですし、歴史上、宗教のない文明もこれまたあり得なかったと言えるでしょう。このように考えますと、二元論的な思想が、何千年も大昔からあったのは当然だとも言えましょう。そこで、このような現実を今一度考えて見ますとき、確かに、民主主義が今一番最高の思想体系であると言うのは容易に頷けますが、「主義」という言葉を、今、「中心」という言葉に置き換えて考えてみますと、民主主義とは、民主中心であり、そして、さらに、資本主義は、資本中心という意味になります。この置換がそれほど間違っていないとすれば、民主主義とは、民衆が中心であるということになります。民衆中心とは、もう少し広義に捉えれば、「人間中心」という思想に到達します。これは、人間肯定の思想、いわゆる「人本主義」という言葉でよく知られています。

そして、資本とは、要は、お金のことですから、資本主義社会とは、「お金中心社会」ということになるのでしょう。しかしながら、それらの社会においても、やはり「宗教」を抜きに、主義・思想を語ることは十分ではないことを考えれば、この世界の様相は、実は、人間中心でもなければ、お金中心でもなく、神様中心の世界観だとも言えるわけです・・・

さて、ところで、有史以来、自分の意思で生まれてきた人は誰もいませんね。そのことは、「自分の為に私は生まれてきた！」と自信を持って言える人は一人もいないはずだということの意味しています。人間は、あくまで、結果的存在なのです。気が付いたら、もう「自分」はそこに居たのです。と言う事は、「自分の為に私は生きる」という時、それは、間違っているとわざるを得ないということです。少なくとも、自分の意思で生まれてもいないのに、自分の為に生きることが絶対的に正しい根拠など、生来どこにもあるはずがないというのです。このことを、もう少し詳しく考えて見ますと、原因はともかくとして、もしも、偶然に、人間が、この宇宙に生まれてきたのならば、存在するようになった「目的」自体がそもそも無いのですから、「自分の為に」生きることが「正しい存在目的」になり得ないです。存在理由が生来ないので、存在目的も最初からある訳がないのです。ですから、自分の為にだけ生きるという自己中心な考えは、自分が勝手に、生まれた後、いつからかそう決め込んでいるだけであって、何ら絶対的な正当な根拠・理由には

なりません。このことは、つまり、善でもないかわりに悪でもないことをも又意味しています。しかしながら、もしも、神様が人間を創造したのなら、神様の中に、人間を創造した何らかの動機・目的・願いがあるわけで、造られた側の結果的存在である人間の中に動機・目的があるはずもありません。すなわち、神様の人間創造の目的に生きることこそが、人間の存在目的に最高に合致しているわけで、最高に存在価値を高めることになるわけですから、自分が主体（中心）ではなく、あくまで、神様が主体（中心）なわけです。ですから、神様の願いに反する行為があれば、それが「悪なる行為」であり、すなわち、「人間の罪」と認定されるわけです。

このように、もし、人間が、単なる偶然に生まれた産物でしかないのなら、自己中心的に生きるとは、もはや善でも悪でもありません。真の意味で、正しくも悪くもないのです。自然法も何も、真の意味であり得ません。人間自体に、元来、存在目的・存在価値がないのですから、その人間の思考回路に価値（善悪）があるはずもありません。「思考」は、ただの生理的・化学的作用でしかないということになります。その思考に基づいた主義・行為もです。ただ、迷惑行為を行えば、訴えられるか、さもなければ、公権力により逮捕・拘束されて裁かれるだけです。なぜなら、迷惑行為は、生理的に、人間に多かれ少なかれ不快感をもたらすので、それを排除しようという欲求が当然に働くわけです。そして、その排除請求の権利に、公権力をもってお墨付きを与えようとするのは、弱い私達人間にとって、当然の歴史的欲求だったはずなのです。戦争も、その欲望の表れでしかありません。正義もなにもありません。お互いの迷惑行為を排除しようとする欲望の表れでしかありません。

私達は、ただただ、その迷惑行為を「不法行為＝悪」と呼んでいるだけであって、国家権力が変われば、法律が変われば、また、時代が変われば、民意が変われば、その「善悪基準」だって変わり得るのです。何ら普遍的なものではないわけです。イエス様がそうであられたように、無罪と思われる人を殺すことが正しい時代、正しい国家だってあったのですし、現にこの世界中のどこかに、今、そのような国家主権があるかも知れないのです。

そして、罪を犯しても、国家の法的根拠に従って合法的に償えば、また社会復帰できる場合もあるわけです。日本では、人を殺しても、5年以上の懲役に服して、改心すれば、死刑でない限り、社会復帰の道が開かれる可能性が高いです。ましてや、14歳未満の場合には、刑法の罪にも問われません。なぜなら、人を殺すことが絶対的に「悪」だということは、偶然に生まれてきた人間なのなら、誰もがそう簡単に言い切れるものではないからです。刑法でも、「人を殺すことは悪である」などと一言も書かれていません。殺してしまったことはもうどうしようもないので、兎に角、罪を償いなさい。ということしか書かれていません。刑法は、行為規範ではないのです。果たして、被害者の遺族がその「刑法」で癒されるのでしょうか？

もし、人を殺すことが絶対的に「悪」だと言う「唯一」の根拠を、私達が、本当に必要とするのなら、それは、神様が人間を創造した目的に反する行為である場合だけだ・・・ということなのです。それ以外には絶対にありません。人間が作った法律に反するからでもなんでもありません。ですから、人間に価値(=尊厳性)というものを認めようとするれば、それは、偶然の産物であっては決してならないのです。存在目的、つまり、創造された目的がなければならぬのです。それ以外には、理論的に、価値自体があり得ないのです。存在目的なくして、存在価値なしだからです。ちょっと考えれば誰でも分かることです。

この宇宙は、神様が創造したか、或いは、たまたま偶然、何の目的もなく発生したか・・・のいずれかでしかないことくらいは、何もビックバン自体を見たことがなくても、皆、容易に推測できることです。科学者でなくても、そんなことは誰でも分かる論理なのです。間違いなく、いずれか一方でしかないのです！！(そういう意味では「一元論」です。)

要は、神様を信じる以前に、神様は実在するかしないかの2つに1つであるというこの単純明快な誰でも分かる「現実」を無視して、あまりに身勝手な放埒な思想が蔓延してはならないということを再考してみる必要があると言うのです。神様が実在するかしないかという現実問題を、民主的な手段で、また、多数決で決めることが出来るでしょうか？不可能なのです。それは、この世界の存在様相を規定する根本条件は、2つに1つだと言うことを意味しています。つまり、偶発的物質的な原因によるか、神様の創造目的に因るかのいずれか一方の規定要因しかないのです。間違いなく、根本条件は、これまた、いずれか一方でしかないのです！！

この世界の真相は、いろんな存在の仕方があってもいいというものではないのです。

ですから、この世界がどのような「存在様相」「根本原理」を有しているかを考えてみることはとても重要なことだと思っています。なぜなら、より正確に「世界の在り方」を認識することで、より深く、この世界が存在していることの意味を考えることができると思うからなのです。

それは、自然界を見れば一目瞭然でしょう。私達が考えている以上に、秩序のある、原理原則のある、法則性のある世界だということなのです。そのような「存在様相」をまず認識しなければならないというのです。もし、多くの方が、神様が実在する方が、この世の多くの現象・実相を説明するのに、よりプラグマティカルだと思えば、神様を信じる人が多くなってもそれは当然なことでありましょう・・・これは、民主主義でも、多数決主義でもなんでもないお話なのです。

この「現象世界」は、まぎれもなく二元論的世界なのです。しかし、この場合の二元論とは、一般的に言われているような、「対立関係」を根本とみる二元論とは正反対の原理です。

神様が実在するかしないかのどちらかでしかないという意味での「善悪論」(善神と悪神の両方が存在するという意味での二元論とは異なります。その意味では、私達は、一元論の立場です。)であると同時に、一般的に言われている、主体と客体における「相対(相互)的關係」を通して認識・作用等が生じるという意味での「二元論」のことであります。私達の言う二元論は、決して「対立關係」ではないのです。繰り返し言いますが、この世界の現実、神様が実在するかしないかのいずれか一方でしかないのです。偶然、必然の前にです。信じる信じないの前にです。

「人を殺すことは悪である」と言われる人がいるとき、もし、その人が、神様が実在するの、「しかし、私は神様を信じない」と言い張る場合、その人の不信仰な行為は、「思想・信条の自由」だと果たして言えるのでしょうか？もし、そう言われるのなら、「人を殺すことも自由だ」と、その人は主張しなければならないでしょう・・・人を殺すことが「悪」である唯一の絶対的根拠があるとすれば、先に申し上げたとおり、神様の人間創造の目的に反する行為であるから、という理由以外にはないからです。

「悪なる自由」を行ってよいわけがないのです・・・神様が実在し、神様の願いがあるのに、神様を信じないで、神様を無視する行為は「悪なる自由」なのです。このように、自由には責任が伴うというのです。

もし、神様という精神世界(意思)を持ったお方が、宇宙の第1原因であり、創造主ならば、「物質」でさえ、目に見えない精神的な意思(目的性)を持った「もの」(神様の属性)から、究極的には産出され構築されていなければなりません・・・また、もし、神様が実在しないのならば、宇宙の根本は、物質でしかないでしょうから、物質以外を原因とした「精神世界」を完全に否定しなければならないでしょう。このどちらか一方の現実が、人間が、この宇宙で、この世界で、生きて行く上で、一番大前提となる思想・価値観の根底になっているはずなのです！本人が意識するしないに関わらず、宿命的な規定条件なのです。

また、上述したとおり、宗教のない文明は有史以来なかったと言ってよいでしょう。それは、「死は怖い、人は必ず死ぬ」ということを人間が知ってしまったから、その恐怖の解消を担保してくれる「宗教」が必要になったのだ・・・と言われた或るジャーナリストがいましたが、まさに、それは当たらずとも遠からずだと思います。つまり、霊界が実在するかしないかも、2つに1つなのです。信じる信じないの前にです。事実はどちらか一方でしかないのです。ある人には、霊界が実在し、ある人には、霊界は実在しないという代物ではないでしょう。

神様が実在しなければ、この世は全て物質的な物理的・化学的作用の現象でしかないのです。愛も心も、精神も、全て脳みその作用でしかないと見るのです。そして、煎じ詰めれば、

愛は、DNAというタンパク質の作用です。当然、霊界などあるはずもないわけです。それは、目に見えない神様が実在するかしらないかと多分にリンクしているのです。2つに1つでしかないのです。ですから、創造主なる神様を信じる宗教は、往々にして霊界も信じているのです。

そして、神様が実在しなければ、先述したとおり、真の意味での善悪はあり得ないので、力（権力・経済力 etc・・・）を持った人が、「自由」をたくさん享受し、また、善悪の基準にもなりやすいのです。しかし、もし、創造主なる神様が存在すれば、神様の願いに反することは、「悪」である可能性があるので、彼らなりの「自由」が拘束される可能性があり得ます。神様が認める「責任ある自由」と、力を持った人間達が享受したい「自由」との境界線が違う可能性があるからです。

果たして、私達人間は、この現実をどれだけ歓迎する準備が出来るでしょうか？

このように、神様が実在するかしらないかという2つに1つの超現実問題は、実は、あらゆるすべての問題の根本問題なのです！ですから、私達は、結果的存在であるこの世界の「存在様相」を、まず出来る限り客観的に正確に把握してみることにすべきだと思うのです。

そのことを考察してみる前に、次のようなことを少し考えておきたいと思います。変な話ではありますが、他人を殺そうとしている人が、「包丁」を持てば、凶器としての価値が、否応なく発揮されます。また、料理人が、「包丁」を持てば、それは、調理道具としての価値が、縦横無尽に発揮されるのです。その是非はともかく、それを造った人、もしくは、それを必要としている人に因って、存在目的（利用目的）が生じ、そして存在価値（利用価値）が生じます。或る時計が、もし、正確な時刻を刻まないどころか、止まっていたとしても、そのような時計が必要な人にとっては、その時計が「正しい」のです。「善」なのです。「価値」があるのです。「意味」があるのです・・・

このように、「価値」とは、独自のには生じないのです。必ず、相対的關係を通して生じると言うのです。必ず、主体・客体という「関係」がなければならぬのです。ですから、人間がもし、目的もなく単に偶然に発生した生物でしかないのなら、そのような「相対的關係」がないのですから、「価値」があるはずがないのです。元来、存在している「意味」がないのです。善も悪もありません。私達の考え方は、このように、「相対的關係あるところに価値（意味）あり。」という考えです。これが、私達の科学哲学的命題でもあります。道端で、空に向かって手を伸ばして何回もジャンプしている人がいたとしますと、これはもう、傍からそれだけを見れば、異常な人だと誰もが思うでしょう・・・しかし、その人が、もし、赤トンボを採ろうと手を伸ばしてジャンプしているのであれば、その行為は、異常ではないのです。「意味」があるのです。「価値」があるのです。行為の目的である客体（対象）があるからです。相対的關係が「有意義」に成立しているからです。

仮に、今、もし、神様と言われる創造主が、「悪いお方」だったとしましょう。そうだとすれば、この世界で、その神様がお造りになられた人間同士が、醜い？戦争をして、悲しみ？に明け暮れて、不幸？に陥っていくことこそが「善」だと言うのです。「価値」があるのです！なぜなら、人間をお造りになられた悪い神様の願いとおりに不幸に生きているからです。神様はそれを観て喜ばれるのです。神様の創造目的にちゃんと合致しているので「価値」(意味)があるのです。しかし、神様が善なる愛のお方だとすれば、造られた人間同士が、戦争し、争い、傷つけ合う世界は、神様の願いではないはずですので、「悪」なのであり、神様にとって「本当の価値」がないのです。間違っているのです。欠陥のある故障した作品なのです。

ところが、もし、いずれの神様もいらっしゃらない・・・すなわち、目的もなく、造られたわけでもなく、単なる偶然に、発生した生き物の「なれの果て」が人間だというのなら、戦争をしようが、幸せになろうが、不幸になろうが、それは、善でも悪でも何でもないことになってしまうのです。もともと「価値」がないのです。もともと人間の行為自体に意味がないのですから、何をやってもボウフラのようにただうごめいているだけになります。ただ、個人個人の欲望を満たし、それぞれの快樂を得るだけの行為になってしまいます。目的もなく発生した物質でしかない人間自体に、そもそも「存在目的」があるはずがないのですから、「存在価値」もあるはずがないのです。

ですから、人間に尊厳性(存在価値)があると言うからには、ひとえに、人間が「相対的關係」を持ち得る何らかの、より主体的存在があるかどうかにかかっていると言うのです。人間は、あくまで結果的存在でしかないのです。そのような人間が、存在理由もなく、存在目的もなく、この地上で生活していたとしても、それは、人間の本来持っているはずもない「存在価値」自体を高めたことには到底なり得ないのです。「ただ、生きて死んだ・・・」というだけのことでしかなくなってしまうというのです。自分で価値があると、何万偏、言い聞かせてみたところで、それは、自己満足でしかなく、そもそも、厳密な意味で追求すべく科学哲学的な「人間の存在価値」そのものではないというのです・・・

存在価値を否応なく最高に発揮するには、先ほどの「包丁」の例のように、もともとの存在目的(創造目的)に、より合致していなければならないのです。物質でしかない人間に価値があるかどうかは、物質自体が決めることはできません。

「包丁」と一緒なのです。仮に、もし、物質でしかない人間だったとしても、そのような人間を、「目的」を持って造ったお方が他にいらっしゃれば、「存在価値」があるのでしょうし、必要とするお方がいらっしゃれば「存在理由」があり得ると言うのです。「価値」があるというのです。価値とは、このように、独自の生じるものではなく、あくまでも、「相対的關係」を通してのみ、良くも悪くも生じるのです。決定されるのです。

国家権力のもとに、一方的に善悪が決定されてしまうこともあるわけですが、それは、真の意味での善悪ではありませんし、「価値」とは言えません。普遍的なものではないのです。しかしながら、そのような圧政下でも、決して人の心は屈しなかったのです。つまり、より「善」を指向しようとする、より「自由」を指向しようとする「良心」だけは、絶えず、人の心の中に存在し続けてきたのです。歴史上、いかなる権力者・独裁者と言えども、人心から、「良心」を消し去ることだけはできなかったのです。このことは一体、何を意味しているのでしょうか？これ即ち、歴史を超えて、時空を超えて、絶えず、そのような「善」を指向する万民の良心」をいつも後方支援し、司る、何らかのより主体的な存在がいらっしや、その存在との「相対的關係」を通して、ひたすらに、自分達の存在価値を押し量ろうと身悶えしてきた私達人間の生き様が、まさしく「人類歴史」そのものだったということなのではないでしょうか・・・？

踏みにじられても踏みにじられても常に起き上がってきたその人間の「良心」の作用に対して、常に働き続けてきたその主体的な相手を、即ち、私達は「神」と呼ぶわけであります。ですから、私達は、神様は、「善」なる神様だと想定するのです。

このように、創造主と人間との相対的關係を通してのみ、人間の存在価値が生じ得るのであって、そうでなければ、つまり、目的もなく単なる偶然に発生したのなら、そのような人間の心は、生来、存在価値があるはずもないのです。

「完成」という概念も、そのような相対的關係を通してのみ成就すると見ます。設計者の設計図どおりに具現化して初めて「完成」なのです。誰が見ても「欠陥」がある作品だとしても、それが、設計図どおりであり、作者の意図するものであれば、それは、「完成」した立派な作品なのです。このように、「完成」という概念も、相対的關係を通してのみ成立するのです。「完全」と「完成」は、違うのです。神様が完全無欠なお方であろうと、作品であるこの被造世界が「完全」「完璧」である必要があるかどうかは、私達には知る由もないのです。神様からご覧になられて、「完成」されていればそれで「はなはだ良し」なのです。それが「善」なのです。作者と作品という相対的關係によって、「完成」という概念もはじめてあり得るのです。

ですから、作者である神様と、作品である人間との「関係」を議論しなければ、そもそもが、「人間の尊厳性」「生まれながらの人権」などという「価値観」のお話自体が、ナンセンスだと言うのです！「相対的關係」を抜きに、結果的存在である人間達だけで結論が出るはずがないのです。

花を見てきれいだと感じる人でも、神様を否定する人であれば、その花は、「完成」しているとは決して言うてはならないでしょうね。偶然、人間の目で見て美しく、偶然、香り良く咲いているだけなのだと言うよりほかにないのです・・・

その花が、「1つの完成基準」を満たしていると言うからには、その作品である「花」を「完成」させた作者を認めなければならないのです・・・品種改良できるのも、「完成」しているから可能だと見るべきなのです。

私には、この世のどんな小さな花（種）も、どこから見ても、「1つの完成基準」を満たした見事に「プログラム」された「すぐれた作品」だとしか思えませんが・・・

四位基台

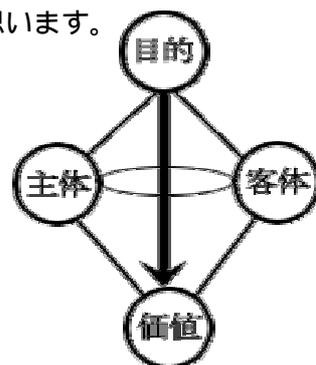
さて、ここで、きちんと今まで述べてきたことを整理してみたいと思います。

つまり、私達の命題は、

- 1．相対的關係を通してのみ作用・価値が生じる。
- 2．存在目的なければ存在価値もなし。
- 3．前項の1．2．を通して、四位基台（デザイン）が造成される。

故に、「四位基台こそが、この世の存在様相の根本デザインである。」

というものであります。



二元論的思想は、何千年も前からありましたが、「相対的關係が“有効”に成立するところには、価値がある」という考え方は、ユニークな科学哲学的アプローチだと思います。

私達人間を含めたこの世界が、価値がある、意味がある世界であるためには、必ず、相対的關係が有効に成就され、維持されていなければならないと見るわけです。そこで、自然界に目を向けてみたとき、私達は、そこに、驚くほど無数の有効な相対的關係を発見することができますでしょう。ここで、相対的關係とは、相補的（ペア）関係と言っても良いでしょうし、相互関係と言っても良いでしょう・・・但し、対立関係では決してないということです。善と悪とは、指向する目的が相反するので、対立関係であっても、相対的關係とはみません。光と影もそうですね。光は、影がなくても存在し得ますが、影は光がなければ存在できません、しかも、その光源がその物体の真上に来れば、理論上、その影はなくなります。ですから、これも、相対的關係ではないのです。右手と左手は、「目的」を同じくして、動じ静ずるので、「相対的（相補的）関係」とみるわけです。

例えば、プラスとマイナスという相対的關係です。

原子における、陽子と電子の関係も、相対的關係です。単独では、存在しておりません。

陽イオンと陰イオンの相対的關係もそうです。

男性と女性の相互作用

オシベとメシベのペア関係

オスとメスの相対的關係

男と女の相補関係

交感神経と副交感神経 動脈と静脈 右手と左手 右脳と左脳 右心房と左心房・・・

細胞と細胞の相対的關係・・・

遺伝子のグアニンとシトシンの相互作用

アデニンとチミンの相対的關係

宇宙における4つの力の相互作用の相対的關係

そのほかあらゆる化学的物理的相互作用・・・

これらは、皆、鉱物・植物・動物・人間を問わず、あらゆる生命体の根幹をなすものであり、「相互作用」なくして「生命作用」はないと言っても決して過言ではありません。このような相対的關係なくしてあり得ないのが、この世界の「存在様相」であるということをも今私達は再考しました。

つまり、生存する為のすべての「力」は、必ず「作用」を通して生じるのですが、「作用」は、必ず、やりとりをするための何らかの主体と客体（対象）との相互關係を持たずしてはあり得ないので、存在の前に、相対的關係がなければならぬと私達は見ているわけです。ビックバンという爆発現象も、そのような作用が生じる前に、主体と客体との相対的關係があったと見るのです。

太陽と地球 地球と月・・・皆、相対的關係を以って初めてお互いが存在しているのです。

「存在」の前に、「相対的關係」なのです。そのような「概念」がなければならぬと見るのです。このことは、何を意味するのでしょうか？それは、命題のとおり、相対的關係を通してのみ存在価値（意味）があるということの意味するのです。DNAの遺伝子暗号が、相対的關係を持って出来上がっていることは明白であります。これは、すなわち、遺伝子暗号は、「意味」があるということを表しているのです。意味のない「暗号配列」などあるのでしょうか？あのDNAの螺旋構造の遺伝子暗号が、「意味のない配列」だと信じている科学者がいるのでしょうか？なぜ、「螺旋構造」という相対的關係（ペア）になっているのでしょうか？そこに、「意味」（価値）がないのでしょうか？

意味があるように見えるだけなのでしょうか？たまたま、そのように都合のよい状態にまで、10数億年で進化したと言うのでしょうか？

このように、相対的關係が有効に成立しているところには、「価値」「意味」があるということが言えなくはないのでしょうか？？そのような見事な「マッチング」「ペアシステム」「相補關係」がいかなる過程をとらない成立したかどうかは、議論の余地が多分にあるところだと思いますが、いずれにせよ、そのような「相対的關係」が有意義に成立している事実がいったい何を物語っているかと言えば、そこに「価値」があるという事実を、私達をして推測可能ならしめるということだと考えるのです。

つまり、私達は、進化というものを否定しません。そのプロセスが突然変異であれ、累積淘汰であれ、何であれ、とにかく、相対的關係が見事に成立しているところには、「価値」「意味」があると見るのが、私たちの原理なのです。そして、価値があるということは、目的があるということなのです。なぜなら、目的なくして、価値はないからです。

これを図に示せば、「四位基台」になるのです。これが私たちの言う「デザイン」なのです。進化における、突然変異も、累積淘汰も、もし、それが正しいとすれば、必ず、デザインを伴っているはずだということなのです。目的を持って突然変異が起こったのであり、目的性を指向して累積淘汰が起こって来たと観るのです。要は、相対的關係が見事に、有意義に成就しているという事実が重要なのです。

つまり、今日現存している人間を含めたすべての生物は、淘汰されずに生き残ってきた百洗練磨の有利な個性体であるわけですが、皆、例外なく「相対的關係」を見事に「構築」してきたものばかりであるという事実なのです。これが重要なのです。逆に考えれば、相対的關係を100%うまく「構築」し得るような突然変異や累積淘汰が行われてきた個性体だけが生き残っているととも言えるのです。それには、例外がないのです。要は、そこに、目的性を認めるか認めないかだけなのです。それは、また、価値（意味）があるかないかということと同義なのです。目的なくして、価値はないからです。

進化論者は、突然変異に、また累積淘汰に、価値・意味を見出すことはできないのです。なぜなら、彼らは、目的性をまったく認めようとしなからず。たまたま、すべてが、相対的關係になってうまく機能するようになっていっているのだ・・・としか言えないのです。偶発的突然変異や累積淘汰に、当然なら法則性や規則性を認めることはしません。しかし、累積淘汰によって進化してきた現存する生物のすべては、例外なく皆、相対的關係をうまく作用させて生命活動を行っているのです。それには、例外がないのです。およそ、生命活動のほとんどすべては、「相互・相対」的關係による何らかの「機能」により「作用」していると言えます。しかし、進化論者は、たまたま、「相対的關係」を偶然持ちうるようになっただけなのだ・・・としか言えないのです・・・累積淘汰には、そのような「傾向・性質」が見られるとは言わないのです。だとするならば、「生命体」自体の内部に、そのような何らかの傾向・性質が、原始よりあらかじめあったと考えてもおかしくはないでしょう・・・

進化論者は、「どちらが先か知らないが、とにかく、偶発的に、グアニンの前にシトシンが、或る日、たまたま現れて、お互いを意識しはじめ、お互いがペアだと悟り、たまたま運よくお互いが機能しあうようになっていったのだ・・・」というわけでありませう。

「たまたま、相性がよかったのだ・・・」というわけでありませう。

そして、そのような偶然が折り重なって連関し合い、DNAの暗号レシピが無意味に「完成」したと・・・(彼らは、「完成」という言葉は嫌うでしょうが・・・)そして、それらの相対的關係による生命の営みは、価値があるように人間が勝手に思い込んでいるだけで

あって、決して意味のある関係ではないのだ・・・と言うわけです。
意味があるように見えるだけだ・・・と、進化論者は言うでしょう。

果たして、本当にそうなのでしょうか？

宗教と科学がまったく相容れないものだという主張は、人間の勝手な推測でしかないのです。人間や動物、昆虫、植物等は、皆、神様による最高の科学を屈指した結果の最高の作品であり、それを私達は、ただ科学的に分析しているにすぎないのではないのでしょうか？科学的に作られているからこそ、科学的に分析しようとするのが私達に可能なのではないのでしょうか？「現実」であれば、それは、すべて「科学」の対象であるべきです。

結果である作品を、私達人間の知り得る科学的手法により分析しておいて、「生命」とは実に凄いものだ！と驚嘆しておきながら、果たして、その観察した「作品」が、「科学的」に作られていないと言う認識は、一体、何と理不尽な情けないお話でしょうか？

ましてや、その作者が、最高の科学者である神様だなんて夢にも思わないでいるのです・・・そう考えますと、私達人間とは、実に傲慢な存在だと思わざるを得ません。科学的手法を有するのは、人間だけの特権だと勘違いしているのです。神様がまず最高の科学者であられるのではないのでしょうか？そう思うべきです。つまり、この世の現象の裏と表がそれぞれ、宗教と科学のような気がするのです。表裏一体だということです。

さて、そこで、今、こういうことを私は考えてみたいと思います。まず、カレーライスがテーブル上にあるとしましょう。そのカレーライスという「結果的存在」をいくら科学的に分析しても、そのカレーライスがどうしてそのテーブルにあるのかは、永遠に分かり得ないのです。お母さんが、子供の為に作ったというその動機・存在目的（理由）だけは、人間が現在知っている科学的分析手法では、見えてこないのです。事実、お母さんは、動機をもって、それを科学的な調理法に基づき作り、そして、科学でいうところの「分子構造」を持ったカレーライスは実在しているのです。しかし、その「存在理由」は、人間の知っている「科学的分析」では絶対に見えてこないのです。ちゃんと「存在理由」があるにもかかわらずです。そのカレーライスには、「存在価値」があるにもかかわらずです。

これが、今の人間の科学の限界なのではないのでしょうか？私達は、この世界の存在様相を、私達が常識的に考えている一側面的な科学的手法だけで、「分析」しようと努力しているだけなのです。それだけでは、この造られた被造世界の現象を、本当の意味で正しく認識することは到底無理なのかも知れないのです。存在の前に、相対的關係が必要なのです。相対的關係の前に、目的・存在理由が必要なのです・・・理由がなければ、動機がないのです。動機が無いのに、「相対的關係」が、どうしてこうも見事にことごとく成立しますか？何千億年たっても、縁がなければ一蓮托生の相対的な「化学結合」などあり得ないという

のです。縁がないのに、どうして、太古の海で、アミノ酸同士が結合し続けていることが出来ますか？一生懸命、抱き合っていることが出来ますか？ナンセンスだと言うのです。お互いが、お互いを自覚し合う動機がなければ、波打ち際で出会っても、また別れて離れてしまうというのです。ロマンも何も無いのです。奇縁もなければ、奇跡もありません。

存在するには、存在理由がなければならぬのです。動機がなければなりません。お互いが双方向かい合おうとする動機が最初からなければならぬというのです。なぜなら、相対的關係なくして、存在するための力が発生し得ないので、存在する前に、相対的關係という「概念」がなければならぬのですが、その概念を共有する為には、共通目的がなければならぬからです。つまり、相対的關係という概念・性質が、少なくとも各個性体の中に内在していなければならぬというのです。そのような概念なくしては、動機がなくしては、何も始まらないというのです。では、各々の個体自身が、そのような相対的關係を認識し得るでしょうか？グアニンがシトシンをどうして偶然に独自に自分の相手として認識できるでしょうか？それは無理だと言うのです。

相対的關係を有意義に作用させているあらゆる現象には、機能性があるということなのです。「作用」の意味があります。機能的価値があります。価値があるということは、目的があるのです。目的性を認めなければならぬと言うのです。「目的」のない「すぐれた機能」があるでしょうか？「目的」のない「すぐれた（細胞）組織体」があり得るでしょうか？

その動機（目的性・方向性をもった作用エネルギー）を絶えず後方支援し、司る、何らかのより主体的な存在がなければならぬというのは、もうお分かりのことだと思います。それは、最初から、双方を、「相対的關係」として結びつけた縁結びの神様がいらっしやらなければならぬということなのです。ですから、「相対的關係」という概念を、まず先に持ったお方が、この世界をこのような存在様相に造られたと考えるほかないのではないのでしょうか？

そのような相対的關係を関連付ける規定条件を先に有したお方が存在しなければ、この世界が、結果として、このような条件の下に、このような「存在様相」になるはずが無いというのです。原因の中にない性質・概念・属性が、結果として現象化するはずが無いのです。結果は、原因に似ていなければなりません。

そのような「先有条件」を設定した「設定者」こそが、まさしく、宇宙の第1原因である創造主なる神様なのです。そのような「相対的關係」という概念を、宇宙を創造する前に、最初に抱いた神様がいらっしやればこそ、私達は、「神は愛なり」と言えるのではないのでしょうか？